

研究タイトル:

英語教育におけるマイクロアグレッションの問題化



氏名: 中原 瑞公 / NAKAHARA Mizuki E-mail: nakahara.mizuki@oshima-k.ac.jp

職名: 助教 学位: 修士(教育学)

所属学会・協会: 全国英語教育学会, 日本教科教育学会, 言語文化教育研究学会, 異文化間教育学会

キーワード: 英語教育, 人権教育, 多文化教育, マイクロアグレッション

技術相談
提供可能技術:

- ・英語教育に関する文献
- ・人権教育に関する文献
- ・多文化教育に関する文献

研究内容:

近年、多文化共生や人権啓発に関わる議論のなかで、マイクロアグレッション(Microaggressions)の問題が取り上げられるようになってきている。マイクロアグレッションとは、「何らかのマイノリティ集団(例えば、有色人種、女性、LGBTQなど)に属していることを理由に、ある人に対して中傷的メッセージを伝えるような、何気ない日常のやり取り」(Sue & Spanierman, 2020, p.36)と定義される。善良であることを自認する人々によって、悪意なく無意識的に行われるため、受け手はその解釈に多大な心理的エネルギーを費やすことになる。マイクロアグレッションは「千の切り傷による死(Death by a thousand cuts)」(Nadal et al., 2011)と呼ばれるように、ひとつの言動は些細なものであっても、絶え間なく繰り返されることで、受け手のメンタルヘルスに著しい悪影響を及ぼす。

マイクロアグレッションの多くはことばによって引き起こされる。加えて、マイクロアグレッションは日常のコミュニケーションにあふれており、全ての人に加害者にも被害者にもなりうる。ことば・コミュニケーションの教育である英語教育にもマイクロアグレッションの問題に対する学術的・倫理的応答責任がある。しかし、これまでのところ、英語教育においてマイクロアグレッションの問題は議論されていない。外見や名前から「外国人」と判断しうる初対面の人に対して出身国(地)やルーツを唐突に尋ねることや、言語能力(特に、発音や流暢さ)を良かれと思って褒めることはマイクロアグレッションの典型であるが、英語教育では当たり前のことであり、その行為の何が問題なのかが認識されているとは言い難い。現状では、英語教育そのものがマイクロアグレッションに対する児童生徒および教師の感受性を低下させ、マイノリティの人権を侵害する潜在的な場となっている。

以上の問題意識にもとづき、「『目に見えないもの』を見えるようにする」(Sue & Spanierman, 2020)という方針のもと、本研究は「なぜ英語教育においてマイクロアグレッションが問題なのか」を論じることを目指す。

参考文献

- Nadal, K. L., Issa, M., Leon, J., Meterko, V., Wideman, M., & Wong, Y. (2011). Sexual orientation microaggressions: “Death by a thousand cuts” for lesbian, gay, and bisexual youth. *Journal of LGBT Youth, 8*, 234-259.
- Sue, D. W., & Spanierman, L. B. (2020). *Microaggressions in Everyday Life. Second Edition*. Wiley.

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)	